

分野の設定方法等
についての考え方

複合的・学際的な分野
(取り上げられない分野)
についての考え方

- 選定方法：
 - ・階層選択と境界整理
 - 階層選択については、「上か下か中間か」ではなく、「先ずできるだけ上に、次に必要に応じて下へ」が適当であると考えられること
 - ※細分化された個々の領域の論理よりも、まず普遍的な理念・哲学の共有を
 - ※「上から下へ」は可能であるが、「下から上へ」は困難であること
 - ※国際的な整合性についても考慮する必要性
- 判断主体：
 - ・誰が判断するのか→学術会議の各部・各分野別委員会
 - ・学術会議に関連する分野別委員会が存在しない分野の取扱い（→大学団体？）
 - ◆課題別委員会による基本リストの作成・提示（大分類と中分類）
 - ◆学術会議の各部・各分野別委員会（及び大学団体）による検討
 - ◆リストの確定
 - ※一定の期間の確保が必要となる可能性（早期に作業を行う必要性）
- 選定順序：
 - ・取り上げる順序
 - 基本的に各部の意向を調整して決定するが、第1回の対象分野は、モデル事例として、課題別委員会主導で相当に数を絞って取り上げる
- 相互関係：
 - ・各種の学協会等の取組みとの関係
 - 基本的な関係の整理は「参照基準」自体の位置付けにおいて行う
 - 具体的な取扱いは各分野別の審議において検討する
- 審議体制：
 - ・審議体制 →（大学の多様性の反映、分野の専門家のみによる思考の同質性の克服、学協会等との連携、課題別委員会との連絡 等）
 - ・審議上の諸ルール →（公正透明な意見の集約、個別利害の克服、課題別委員会による全体的な統括 等）

参照基準自体の在り方についての更なる検討

- 運用体制：
 - ・将来にわたる分野の追加や内容の修正等
- 具体的な活用の在り方：
 - ・第三者による検証も念頭に置いた、各大学における参照基準の活用の在り方に関する具体的なイメージ

分野の単位の設定並びに分野の選定についての基本的な考え方 (案)

○基本的な留意事項

教育プログラムは、学問の発展や社会のニーズの変化に対応して、常に分野の生成改廃を続けていくものであり、伝統的な学問分野の区分に当てはまらないようなプログラムについても、それらの存在はポジティブな可能性をはらむものとして尊重されねばならないこと

○分野の単位の設定

「分野」として設定される「単位」は、分野としての「実質」を備えており、過度に広範囲でなく、かつまた過度に細分化されていないこと

- 1) 固有の学問分野として一定程度完結しており、かつまた学士課程教育において、独立して系統的な教育プログラムを実施する意義を有するもの
- 2) 固有の専門職業に密接に結びついており、かつまた学士課程教育において、独立して系統的な教育プログラムを実施する意義を有するもの
- 3) 複合的・学際的な分野については、基本的には、複数のもとの分野の組み合わせとして考えるものであるが、既に実質的に一つの分野として認知され、それに対応して系統的な教育プログラムを実施する意義を有する場合に、分野として選定する可能性を否定しない。

※ 複合的・学際的なプログラムや非伝統的なプログラムにおいては、「分野」という枠組みにとられないことで、固有の教育研究上の意義を発揮している場合も少なくないので、そうしたプログラムを採用している組織に画一性を強いたり、多様性や柔軟性を損なったりしないような配慮が必要であること

たとえば、そうしたプログラムを採用している組織が、選定された諸分野の各要素を組み合わせることでプログラムに独自の体系性を作り出すこと、あるいは、選定された諸分野の各要素とは異なる独自の体系性を工夫したりすることは、奨励されるべきであること

○分野の選定

分野は相当の数が存在すると予想され、すべてを取り上げることは困難であると思われることから、当該分野を履修している学生の数等も参照して、一定数（単年度では 10～15 分野程度）のものを選定すること

※ 当然のことながら、選定されなかった分野について、そのことを以て否定的に見なされるべきものでないことについては特に明確にする必要があること

※ 課題別委員会の審議期間終了後においても、追加や見直しが行われ得る仕組みについて検討しておく必要があること